

UU ユー・ユー・ナウ n now

世界遺産の島に生きる



CONTENTS

- 1 OB. OG. INTERVIEW
- 4 特集「宇大グッズ&ブランド」
- 6 地域貢献REPORT
- 8 Welcome to 授業
- 9 Welcome to 研究室&ゼミ
- 10 研究Keyword / 私の学生時代
- 12 宇大生は今!
- 14 UU News
- 15 INFORMATION

OB.OG. INTERVIEW

Suzuki Hajime

鈴木 創

NPO法人小笠原自然文化研究所 副理事長

世界遺産の島に生きる

「NPO法人小笠原自然文化研究所」の鈴木創さん。昨年6月世界遺産に登録された小笠原諸島の自然、希少生物を守る活動を続けている。取材班が編集委員との打ち合わせを終え、小笠原に向かおうとしていた矢先、「20年前に観察されたのを最後に絶滅したとみられていた海鳥が、小笠原で見つかる」というニュースが飛び込んできた。この海鳥の研究グループに鈴木さんが加わっていた。父島在住の鈴木さんに同行し、研究報告会が開かれる母島に渡った。

よくぞ生きていてくれた

夜7時、小笠原村役場母島支所大広間。報告会会場には父親に抱かれた女の子から年配者まで幅広い年齢層の人たちが集まっている。2月でも昼間は夏を思わせる陽気。発表者の鈴木さんはTシャツ姿だ。

研究グループは小笠原で97年から昨年までに採集された小型の海鳥ミズナギドリ類6羽の標本を詳しく調査。DNA鑑定の結果、ハワイ近くのミッドウエーで90年代まで観察され、昨年、新種と判明した海鳥と一致することを突き止めた。絶滅を疑



05年に父島で生きた状態で保護された海鳥ミズナギドリ類。この鳥は、その後死んだが有力な情報を残した。今回の調査で新種の海鳥であることが確認された。(写真提供：小笠原自然文化研究所。撮影：鈴木創氏)

われる鳥類が国内で再発見されたのは60年前のアホドリ以来。ハワイ、筑波、小笠原の3カ所で発表され、小笠原の担当が鈴木さんだ。

「知らないうちに絶滅していて、『こんな鳥がかつていたらしい』という話になりかけていた生物が、偶然小笠原で見つかった。早急にレッドリストに加える必要がある」と語りかけ、ハワイの研究チームと合同で繁殖地と繁殖規模を特定する調査を続けていることを報告した。

主要な繁殖地は小笠原である可能性が高く、研究チームは和名を『オガサワラヒメミズナギドリ』とするよう提案していることを紹介し、「世界が、いま、(このニュースに)興奮している。僕らも大いに喜びたい。こんな素晴らしいことが小笠原で起きたということは、本当に夢のある話。よくぞ生きていてくれた」という思いです。なんとか、この鳥を次世代につなげたい」と結んだ。

死にものぐるいだった

父島に戻ると、鈴木さんは色あせたTシャツを見せてくれた。胸にはMAEDA SCHOOL OF FORESTRYの英字とブナの葉。背中には、「だれでもいらっしやい」の文字。大学の恩師で、森林の生態と造林学、特に「ブナ林の天然更新」の研究の大家である前田禎三教授が、10数年前病に倒れたとき、門下生たちが病氣快復を願って作ったという。「だれでもいらっしやい」は前田教授の口癖だ。

「豪快で、太く深い根を持つ人。一人ひとりを面白がってくださった。劣等生の僕が何とかやっていけたのも先生のおかげです」「ばーろう(ばかやろう)、死にものぐるいでやるんじやい。独特の鳥取弁で怒られたことなど、闘病中の恩師とのエピソードを語ってくれた。

「小笠原に来てからも前田先生の縁でつながりを持っていた研究者がたくさんいます。いまだにお世話になっている感じがします。ありがたいことです」

混声合唱団の活動も刺激的だった。当時、実験的な取り組みであったブ



大学院時代：左から2番目が恩師の前田教授。右手前が鈴木氏(91年、新潟県佐渡島のブナ林にて)



研究報告会で話をする鈴木氏



「MAEDA」のTシャツを着て取材班を見送ってくれた



母島の南端・南崎。半島の中央、赤茶色に見える場所が海鳥の繁殖地。人間が持ち込んだネコに食べられて、海鳥は一時姿を消した。南崎は、ホエールウォッチングの絶好のポイントでもある。

口の音楽家や演出家と共に創りあげる「シアターピース(劇場全体を使い音以外にさまざまな演出を取り入れた音楽)」の公演やレコーディングなど、学生の枠を超えた芸術活動に夢中になった。そして、たくさんの師と今に続く仲間を得た。ちなみに3年で団長を務めたときの副団長が奥様(教育学部出身)である。

希少生物を次の世代に残す

なぜ、東京都職員を辞めなければならなかったのか? 学生編集委員たちが気にかけていたことを尋ねた。

「行政を否定して辞めたわけでは決してありません。行政は世の平均値、スタンダードにならないと行動できない面がある。希少動物保護とか、トライアル・アンド・エラーが求め

られるものは、先頭を走らなければできない。行政に向いているジャンルではないなと思った。やれるなら(行政の枠を飛び越えて)やりたいなと思いました」

「この10年で小笠原は変わりました。私たちのような活動がスタンダードになりつつあります。これからのテーマは島の人たちの暮らしと希少生物の保全を、どう『折り合い』をつけていくかです」

鈴木さんの案内で母島の最南端・南崎に向かった。小笠原の有人島で唯一の大型海鳥の繁殖地を野良猫から守るため、侵入防止柵を設け監視を続けている場所だ。亜熱帯の高木が繁る林で小笠原固有の生物に目を凝らし、海を望む丘の上でクジラが海面をたたく音を澄ます。

ト(ともに天然記念物)の保全の取り組みに良い兆しが見えてきています。そのほかにもいくつかどうしても気になる生物がいて、彼らを次の世代まで小笠原に残せるのか、いまは、それしか考えられない」



鈴木 創【すずき 創】
1965年生まれ、横浜育ち。88年、宇都宮大学農学部林学科(現森林科学科)卒業。91年、農学研究科林学専攻科中退。東京都入庁。林業試験場勤務を経て、96年、小笠原支庁に赴任、鳥獣保護を担当し希少動物の保全や外来種対策に携わる。2000年、NPO法人小笠原自然文化研究所設立。現在副理事長。